

行動分析学における「自己」関連概念(1) スキナーの『科学と人間行動』および初期の著作

長 谷 川 芳 典

1. はじめに

本稿およびその続編は、行動分析学、およびその発展型の1つである関係フレーム理論 (Relational Frame Theory、Hayes, 1995; Hayes, Barnes-Holmes, & Roche (Eds.), 2001; Törneke, 2010; Hayes, Strosahl, & Wilson, 2011 等) において、「自己 (Self)」がどのように扱われてきたかを概観し、今後の展望を示すことを目的とする。

「自己」およびその関係概念は、スキナーの著作の中ではきわめて限定的に使用されてきた。いっぽう、関係フレーム理論では、「3つの自己(自己の体験の3つの側面)」、すなわち、

- ・THE CONCEPTUALIZED SELF (Self-as-content, Self-as-story): 「概念としての自己」「物語としての自己」
- ・THE KNOWING SELF (Self-as-process): 「プロセスとしての自己」
- ・THE TRANSCENDENT SELF (Self-as-context): 「超越的自己」「文脈としての自己」「純粹なる気づき」「視点としての自己」

が重要な概念となっている*¹。

スキナーの初期の著作まで遡って、自己関連概念に関する初期の論考ではどのような限界があったのか、また、その後の発展の中でどのような前提が堅持されどのような部分が修正されていったのかを再整理することは、行動分析学の最前線において自己概念を適切に活用していく上で大いに意義があると考えられる。但し、紙幅制限の都合により、本稿は「連載その(1)」とし

*1 「3つの自己」の呼称は、英語原書、日本語翻訳書、日本語解説書いずれにおいても特定の一語ずつには統一されていない。なお、Törneke (2010、翻訳書2013)は、「3つの自己」について

This is not to say that these three cover all of the possibilities or that other aspects of self aren't valid or useful, but for behavior analytic purposes we need these three aspects. [107頁]

このことは、これら3つの側面によってすべての可能性を網羅すると言っているのでも、自己についてのほかの側面が妥当でないか役立たないと言っているのでもない。これは、行動分析的な目的のためにはこれら3つの側面が必要だ、ということを行っているのである。【翻訳書150頁】

と述べており、「3つの自己」はあくまで行動分析を進める上で必要条件となる3つの側面であって、3つだけに限定できるとか、3つで十分であるとは主張していないと断っている。

関係フレーム理論は、プラグマティズムに基づく真理基準という観点から、仮説検証の積み重ねによる機械主義的なアプローチを越える、有効で実行可能な具体的プログラムの提供を目指しており、将来的に「3つの自己」が「4つの自己」に増えたり、あるいは「自己」に代わる新しい概念に置き換えられたりしてさらに発展していく可能性は残されている。

て、スキナーの初期の著作『科学と人間行動』(Skinner, 1953)を中心として、1940年代の論文や、1950年代に刊行された『言語行動』(Skinner, 1957)の一部の章にも言及しながら、スキナーの初期の考えに焦点を当てることとする*2。

「自己」をめぐる諸問題は、哲学や宗教、さらに心理学諸分野においてさまざまな角度から検討されてきたが、その出発点となるべき定義は曖昧であり、しばしば、素朴な「自己」観に依拠したり、「初めに自己ありき」という暗黙の前提で語られていることは否めない。そこで検討を始める前にまず、「自己」あるいは英語の「self」をめぐる定義上の留意点を挙げておく。

1.1. 国語辞典の定義

例えば、国語辞典『大辞泉』では「自己」は

【自己】おのれ。自分。自身。

と定義されているが、さらに、「おのれ」、「自分」、「自身」を調べると、

【おのれ】その人、またはそのもの自身。自分。自分自身。

【自分】その人自身。おのれ。

【自身】自分みずから。自分。

というように同義反復に陥っていることが分かる。

1.2. 心理学における定義

以下の2冊の心理学辞典(事典)において、英語の「self」または日本語の「自己」がどのような使われ方をしているのかを補遺1に示す。

(1)『心理学辞典』(中島・安藤・子安・坂野・繁榊・立花・箱田(編)、1999)

(2)『最新心理学事典』(藤永保(監)、内田・繁榊・杉山(編)、2013)

補遺1にリストアップした通り、「self-」で始まる専門用語(例えば、「self-concept(自己概念)」の総数は81例、「self」を含む熟語(例えば「conceptual self(概念的自己)」)の総数は31例であった。これらの合計112例の大部分では「self」は「自己」と訳されていたが、「self-control(セルフ・コントロール)」のように「自己」の代わりにカタカナの「セルフ」をあてた例が9例、また「self-esteem(自尊感情)」のように、「自」の文字のみをあてた例も6例みられた。このほか、上記110例とは別に、英語では「self」を含まないものの日本語で「自己」を含む例が6例(「egocentrism(自己中心性/脱中心化)」など)あった。

これらのリストが示す通り、心理学における自己の定義は、それぞれの分野や立場により大きく異なっている。

上掲(1)の『心理学辞典』の当該項目「自己」(越川、1999)では、「一般的には、意識の主体を自我とよび、意識の対象としての自我を自己とよぶが、自己の概念は個々の理論体系でかなり

*2 『科学と人間行動』については、長谷川芳典(2003).スキナー以後の行動分析学(13):50年後の『科学と人間行動』(前編).*岡山大学文学部紀要*, 40, 23-40.で、第1章~第14章の範囲について論じたことがある。本稿は、第15章~第18章を取り上げることになるため、実質的にその続編という位置づけにもなっている。

異なっている。」とした上で、ユング(Jung, C. G.)、ホーナイ(Horney, K.)、サリヴァン(Sullivan, H. S.)、コフト(Kohut, H.)、ロジャーズ(Rogers, C. R.)の定義を紹介している。

また上掲(2)の『最新心理学事典』の当該項目では、

自己とは、同一性を保持して存在するその人間自身を指す。自己については自我egoとの定義の問題が絡むが、一般的に自らについての内的表象を指すには自己、心の統合機能を指すには自我が用いられることが多い。

とした上で、心理学における自己の研究の困難を指摘しつつ、

- ・客体としての自己の動きから主体としての自己の機能やその具体的な動きに迫るという方向。
- ・主体としての自己の感知を取り上げるという方向 (①世界を構成する原点としての、②能動的行為者としての、③世界を意味づける解釈者としての、④対人的交渉の当事者としての、⑤衝動性の源泉としての、⑥感情性の発露としての、⑦内密性をもつ者としての、⑧同一性をもつ者としての自己の存在をそれぞれ感知しているはず)
- ・主体としての自己の機能に、その欠如態から迫るという方向(離人症などの病理現象)

という3つの方向からの研究の可能性を指摘している。

1.3. 英語の「self」、日本語の「自己」

日常レベルでの日本語の「自己」と英語の「Self」には、日常的な用法にもいくつかの差異があり、注意が必要である。

- (1) 「自家受粉 (self-pollination)」のようにselfには「自分で」という意味がある。但し、「自己治療 (但し英語ではspontaneous remission)」や「自己免疫 (autoimmune)」というように、selfを含まない用語にも日本語では「自己」が使われることもある。
- (2) 機械が自分で行う作業は「self-acting」とも呼ばれるが、日本語では「自動」となっている。同様に「self-recording」は「自動記録」となる。
- (3) 「セルフサービス (self-service)」、「セルフタイマー (self-timer)」、「セルフケア (self-care)」のようにカタカナ語として一般名詞化している場合がある。

補遺1に挙げたように、心理学の専門用語においても「self」と「自己」は完全には対応していない。「self-esteem (自尊感情)」、「self-confident (自信)」などのように、「自己」ではなく1文字「自」を割り当てる場合もあり、また、「self-control (セルフ・コントロール)」、「self-exposure (セルフ・エクスポージャー)」、「self-schema (セルフ・スキーマ)」、「セルフ・ハンディキャッピング (self-handicapping)」のように、カタカナ表記のほうが定着している語もある。

1.4. 日本語の「自分」

日本語では「自分を知る」、「自分探し」、「自分とは何か」というように「自分」という言葉がよく使われるが、英語では対応する言葉がなく、必要に応じて1人称代名詞 (I, me) や再帰代名

詞「oneself(myself、yourself、herself、himself、itself、yourselves、ourselves、themselves)」があてられているようである。

『心理学辞典』（中島ほか、1999）では「自分」という語は264項目に含まれているが*³、「自分の心のなか」、「自分が直接観察」というように人称を区別する日常表現レベルにとどまっている。

また『最新心理学事典』（藤永、2013）では、281項目中に「自分」という語が使用されているが*⁴、これまた「自分と相手」、「自分の行動」、「自分の体」、「自分の考え」、「自分を取り巻く日常世界」というように、人称を区別する日常レベルの表現として無定義で使われている。

なお、「自分は○○だ」という表現は、「私(ぼく)は○○だ」と同じ意味・用法であるように見えるが、

(1) 「秋男は、ぼくは泳げないと言っている」と春男くんが言った。

という表現では、泳げない人が、秋男くん自身なのか、それとも話者である春男くんなのか、区別をつけることができない。しかし、

(2) 「秋男は、自分は泳げないと言っている」と春男くんが言った。

という記述では、泳げないと信じているのは秋男自身であることが明確になる。日本語の「ぼく」は公的自己(伝達の主体)であるのに対して、「自分」は私的自己(信じている、思考の主体)の一人称代名詞であるという点で区別されている。*⁵

2. 『科学と人間行動』で扱われている自己関連概念

いくつかの解説書*⁶が指摘しているように、行動分析学の創始者B・F・スキナーは、「自己」という用語が非科学的な使われ方をしていることについては批判しつつ、自らの著書の中で、個別の章まるごと、もしくは、関連する章のかなりの部分を割いて、「自己」に関連する諸問題を論じている。このうち、『科学と人間行動』では、第15章～第18章が最も関連した内容を扱っている*⁷。各章の見出し表1に挙げた。

次に、各章の中に登場する「self」および「self」を含む複合語の出現頻度を表2に挙げた。補遺1に挙げた心理学用語一覧と比較することで示唆されるように、スキナーが論じている「自己

*3 電子辞典版にて検索・カウントした。

*4 Maruzen eBook Libraryにて検索・カウントした。

*5 この例は、「自分」は他者から独立した個人である私的自己を表すが、そういう言い回しが存在することは、「日本人の自己は他者との関係の中のみで自己が成立し、内集団と一体化する」というでは説明できない、という論理に基づき、「日本人＝集団主義」観への反例として挙げられることがある。この議論は、2007年9月開催の日本心理学会第71回大会(東洋大学・白山キャンパス)の「日本人は集団主義的か?— 経済学、言語学、心理学から考える—」(企画者:高野陽太郎氏)で言及された。

*6 例えば、Lattal(2012, 39頁)、トールネケ(2013, 141頁)

*7 「self」あるいは「self」を含む語は第21章「Group control」、第23章「Religion」、第24章「Psychotherapy」、第29章「The problem of control」などでもかなりの頻度で出現しているが、紙幅の制約上、これらの章は、本稿の続編以降で言及することとした。

self」の範囲は、他の心理学領域において研究対象とされている「自己」と比べるとかなり限定的になっている。以下、『科学と人間行動』の各章のタイトルの順に、スキナーの基本姿勢とその後の発展について考察をすすめていくことにしたい。

表 1. 『科学と人間行動』(Skinner,1953) の著書の中で、「自己」について論じられている章と見出し項目.

Section III THE INDEIVIDUAL AS A WHOLE
第15章 "SELF-CONTROL" ("セルフコントロール")
THE "SELF-DETERMINATION" OF CONDUCT(行為の“自己決定”)
"SELF-CONTROL"("セルフコントロール")
TECHNIQUES OF CONTROL(コントロールのテクニック)
Physical restraint and physical aid.(物理的拘束と物理的補助)
Changing the stimulus.(刺激操作)
Depriving and satiating. (遮断と飽和)
Manipulating emotional conditions. (情動的条件の操作)
Using aversive stimulation. (嫌悪刺激の使用)
Drugs. (薬物)
Operant conditioning.(オペラント条件づけ)
Punishment. (罰)
"Doing something else." ("何か他のことをする")
THE ULTIMATE SOURCE OF CONTROL(コントロールの起源)
第16章 THINKING(思考)
THE BEHAVIOR OF MAKING A DECISION(意思決定行動)
ORIGIN AND MAINTENANCE OF THE BEHAVIOR OF DECIDING(意思決定行動の起源と維持)
THE BEHAVIOR OF RECALL(想起という行動)
PROBLEMS AND SOLUTIONS(問題と解)
"HAVING AN IDEA"("アイデアを思いつく")
ORIGINALITY IN IDEAS(アイデアの独創性)
第17章 PRIVATE EVENTS IN A NATURAL SCIENCE(自然科学における私的な出来事)
THE WORLD WITHIN ONE' S SKIN (皮膚の内なる世界)
VERBAL RESPONSES TO PRIVATE EVENTS(私的な出来事への言語的な反応)
VARIETIES OF PRIVATE STIMULATION(私的な刺激状況の多様性)
RESPONSES TO ONE'S OWN DISCRIMINATIVE BEHAVIOR(自分自身の弁別行動への反応)
CONDITIONED SEEING(条件性の“見る”という反応)
The practical importance of conditioned seeing. (条件性の“見る”という反応の実際的な重要性)
OPERANT SEEING(“見る”というオペラント反応)

TRADITIONAL TREATMENT OF THE PROBLEM(問題への伝統的な取り組み)
 Objections to the traditional view. (伝統的な見解への反論)
 OTHER PROPOSED SOLUTIONS(別の解決策)
 Studying one's own private world. (自分自身の私的世界の研究)
 The physiology of sensation. (感覚の生理学)
 Operational definitions of sensation and image.(感覚とイメージの操作的定義)
 The private made public. (私的な出来事が公的な出来事を作る)
 THE SELF AS AN ORGANIZED SYSTEM OF RESPONSES (組織化された反応システムとしての自己)
 The unity of a self (自己という統一体)
 Relations among selves (生活体内の複数の自己の関係)
 第18章 THE SELF (自己) THE ABSENCE OF SELF-KNOWLEDGE(自己知識の欠如)
 Repression. (抑圧)
 SYMBOLS(シンボル)

NOTE: 見出しの日本語訳は、スキナー(著)、河合・長谷川・高山・藤田・園田・平川・杉若・藤本・望月・大河内・関口(訳)(2003).による。

表2 『科学と人間行動』(Skinner,1953)の第15章～第18章における「self」を含む語の出現頻度

第15章 SELF-CONTROL
 4 self(selves) (自己)
 1 self-administered(自動的に)all reinforcements are self-administered
 26 self-control(セルフコントロール)
 1 self-deprivation(自己遮断)
 1 self-discipline (自己鍛錬)
 4 self-determination(自己決定)
 1 self-exploratory behavior (自己探求行動)
 1 self-extinction(自己消去)
 1 self-flagellation(自分をむち打つ)
 2 self-knowledge(自己知識)
 1 self-punishment (自己罰 ※自己処罰)
 1 self-reinforcement (自己強化)
 1 self-satiation (自己飽和)
 2 self-stimulation(自己刺激)
 第16章 THINKING
 0 self (selves) (自己)
 5 self-control(セルフコントロール)
 3 self-determination (自己決定)
 3 self-probes(セルフ・プローブ)
 1 self-prompt (セルフ・プロンプト)

第17章 PRIVATE EVENTS IN A NATURAL SCIENCE

- 0 self(selves) (自己)
- 2 self-control(セルフコントロール)
- 3 self-description (自己記述)
- 1 self-descriptive repertoire (自己を記述するレパトリー)
- 1 self-observation (自己観察)
- 2 self-knowledge(自己知識)
- 3 self-stimulation(自己刺激)

第18章 THE SELF

- 17 self(selves) (自己)
- 3 self-control(セルフコントロール)
- 1 self-description(自己記述)
- 1 self-knowing (自己を知る)
- 9 self-knowledge(自己知識、自己理解)
- 1 self-manipulation (自己捜査)
- 1 self-observation(自己観察)
- 2 self-stimulation(自己刺激)
- 1 selfish (利己的)
- 1 unselfconscious(自己意識のない)

NOTE:

各行の冒頭の数値が出現頻度を表す。カッコ内の訳語は、河合ほか(2003)による。

頻度のカウントにあたってはスキナー財団Webサイト

<http://www.bf Skinner.org/product/science-and-human-behavior-pdf/>

からダウンロードしたPDFファイルを利用した。なお、上記のカウントには、文頭の太文字で始まる語句、及び複数形(selves)を含む。oneselfなどの再帰代名詞は含まない。

3. 「第15章 "セルフコントロール"」と自己関連概念

「セルフコントロール」の文字通りの意味は、「自分でコントロール」、つまり他者からの命令や援助を受けずに自分の行動を自分でコントロールすることである。表1に示す原書第15章のタイトルが「SELF-CONTROL」ではなく「"SELF-CONTROL"」というようにクォーテーションマーク付きとなっていることから示唆されるように、外見上は「自分で自分をコントロールしている」ように見えても、じつは結局、他者や社会の力を借りるものであって100%自力で可能となるものではないという点がいくつかの箇所で見られる。

第15章ではセルフコントロールは以下のように定義されている*⁸。

*⁸ 通常、著作物の引用は原文または日本語訳のいずれか一方で行えば十分と考えられるが、スキナーの英文は難解で、翻訳書ではしばしば誤訳や意味不明の訳があると指摘されている。本稿では、特に誤解が生じやすいと思われる部分については英語原文と、日本語訳を併記引用することとした。翻訳書の訳が分かりにくい、もしくは誤訳が含まれていると思われる場合は、それに代えて筆者(長谷川)自身の訳を併記した(「訳は長谷川による」または「長谷川訳」と表示)。

The positive and negative consequences generate two responses which are related to each other in a special way: one response, the controlling response, affects variables in such a way as to change the probability of the other, the controlled response. The controlling response may manipulate any of the variables of which the controlled response is a function; hence there are a good many different forms of self-control. 【原書230～231頁】

正の結果、負の結果は、特別なプロセスを通じて相互に関連する2種類の反応を生み出す。その1つはコントロールする反応であり、もう一方の反応の出現確率を変える変数に影響を及ぼす。コントロールする反応は、コントロールされる反応の関数関係をつくるあらゆる変数を操作できるだろう。よって、セルフコントロールにはきわめて多様なタイプが存在する。【訳は長谷川による】

ここでコントロールされる反応というのは、環境との関わりにおいて基本随伴性によって強化／弱化される行動であり、コントロールする反応とは、その随伴性に変更を加えるような行動、あるいは、行動が強化／弱化されるような行動機会の選択、弁別刺激の提示頻度を変えるような行動などが含まれる。表1の見出しに示されているように、第15章では、その具体例として、身体的制限(身体的補助)、刺激操作、遮断化と飽和化、情緒的条件の操作、嫌悪刺激、薬物、オペラント条件づけ、罰、不両立行動が挙げられている。例えば、手持ちの現金の大半を貯金しクレジットカードをすべて解約するという行動は、衝動買いによる浪費を抑える効果がある。これは上記で言えば身体的制限に分類されるセルフコントロールと言える。衝動買いの行動自体を弱化するのではなく、その行動機会を制限してしまうからである。ガツガツ食べる様子を他人に見られたくない人は、ディナーに行く前に軽い食事を取る(原書, 234頁)というのもセルフコントロールの一種である。この場合も、ガツガツ食べる行動自体は弱化されていない。確立操作の1つである飽和化を利用して、結果としてガツガツ食べる行動の出現頻度を抑えてしまうのである。

しかし、「コントロールする行動でコントロールされる行動を変える」というのは、原理としては可能であっても、必ずしも実行可能であるとは限らない。この点についてスキナーは、

It is easy to tell an alcoholic that he can keep himself from drinking by throwing away available supplies of alcohol; the principal problem is to get him to do it. 【原書240頁】

アルコール依存の人に対して、保有しているアルコール飲料を捨ててしまえば飲まないでいられると言うだけなら簡単である。しかし、根本的な問題は、そのように行動させることである。【翻訳書、282頁】*⁹

と述べており、「コントロールする行動」を強化するためには結局、周囲の人たちやコミュニティによる支援が必要であり、完全に1人だけで実現できるようなセルフコントロールはありえないと論じた。

ところで、上述の通り、第15章では、コントロールする反応(the controlling response)とコ

*9 特に断らない限り、Skinner(1953)の翻訳部分は、河合・長谷川・高山・藤田・園田・平川・杉若・藤本・望月・大河内・関口(訳)(2003)の対応ページを示す。また英文の原書については、いちいち「Skinner(1953)」とせず、単に「原書」と表記することがある。

ントロールされる反応 (the controlled response) という二分法の考えが示されているが、これは決してオペラント行動に「コントロールする」、「コントロールされる」という2種類があるわけではない。ある反応が、ある文脈のもとで、そのいずれにもなると考えるべきである。これは、一般に「手段行動-目的行動」としてカテゴライズされる2つの行動にも対応している。例えば「新幹線に乗って京都観光に行く」という場合を考えてみる。新幹線を利用することが時間の節約になる(より長い時間、観光できる)という人にとっては、新幹線乗車は観光行動の手段的行動であり、コントロールする行動に対応する。いっぽう、京都観光にはあまり興味ないが新幹線に乗ること自体が楽しみになっている子どもにとっては、「京都に行こう」とせがむ行動は手段的行動であり、新幹線乗車のほうが目的でありコントロールされる行動に対応する。さらには、長谷川(2011)が指摘したように、行動随伴性の入れ子構造^{*10}にも目を向ける必要がある。

なお、スキナー自身は、セルフコントロールの卓越した実践者であると評されており(O'Donohue, & Ferguson, 2001, 165-191頁)、その生産的な日常生活ぶりはしばしばエピソードとして伝えられているほか、晩年には、高齢者向けのセルフマネジメントの指南書として、『Enjoy old age: A program of self-management』という共著書(Skinner & Vaughan, 1983)を刊行している。

4. 「第16章 思考」と自己関連概念

まず、思考の辞書の定義を挙げておく。国語辞典では「思考」は

【大辞泉】 考えること。経験や知識をもとにあれこれと頭を働かせること。… *【中略】*… 心理学で、感覚や表象の内容を概念化し、判断し、推理する心の働きや機能をいう。

【新明解】 冷静に論理をたどって考えること(頭の働き)

というように定義されているが、上記のいずれも「思考とは考えること」、「思考とは頭を働かせること」というように同義反復的な内容となっている。

行動分析学では、思考は当然、行動として扱われる。但し、初めから「思考ありき」、あるいは「我思う、ゆえに我あり」というような立場はとらない。

4.1. 意思決定

表1の見出しにもあるように「思考」には「意思決定(decision making)」が含まれている。但し必ずしも「意思/意志」を前提としているわけではない。少なくとも説明概念として「意思」が

*10 例えば、「自転車で通勤する」という行動は、「ペダル漕ぎ」、「倒れないようにバランスをとる」、「通行中安全を確認する」といった部品の行動を入れ子に含めている。さらに自転車通勤が健康維持目的である場合は、自転車通勤行動は、「朝晩の散歩」、「ジョギング」、「栄養をバランスをとる」といった諸行動とひとくくりになって健康維持につとめるという行動の入れ子に含まれ、その一方、環境保護のために自転車を利用しているのであれば、自転車通勤行動は、「公共交通機関利用」、「クールビズ」、「リサイクル」などの諸行動とひとくくりとなって、環境保護につとめるという行動の入れ子に含まれるようになる。

用いられることはない。

この章で扱われている「意思決定」は、一般的な選択行動よりはもう少し狭い意味に限定されており、複数の行動機会のうちの1つを選ぶ選択、つまり、「図書室へ行く行動」と「トレーニングルームへ行く行動」というように別々の行動機会が可能な複数の部屋があって、どちらを選ぶかといった1回限りの選択に焦点が当てられている。さらには、志望校選択、職業選択、居住地選択というように人生を左右するような大きな決定も含まれている。いっぽう、特定の行動をするかしないか迷っている人に対して、行動を決意するよう説得するケースは(実質上、選択させているとは言えないので)ここでは除外されている。

上記のような「意思決定」過程は、素朴に考えると、「自己」なる司令塔が種々のデータを集め、比較し、最終判断を下しているようにも見えるが、スキナーは、「自己」の存在を前提にしなくても決定が可能であることをいくつかの例をまじえて説明している。

第16章で特に注目しておきたいのは、他者に対してだけでなく自分自身の行動に対してもプロンプティング (prompting) やプロービング (probing) が行われるという可能性である。このプロンプティング、プロービングについては原書「第14章 複雑なケースの分析」に詳しい説明がある。

... 言語による暗示は、付加的な刺激作用の種類によって分類される。模倣的もしくは反響的な場合には、同じ形の刺激を提示することによって反応を強める。われわれはこれを形態的 (formal) な暗示と呼ぶことにしよう。非言語的の刺激あるいは別の形の言語刺激によって反応を強めるときの暗示は意味的 (thematic) な暗示と呼ぶ。反応が前もって特定できるかどうかによって、交差分類される。暗示によって生じる反応が前もって特定できるものを“プロンプト” (prompt)、そして特定できないものを“プローブ” (probe) と呼ぶならば、形態的 (formal) プロンプト、形態的 (formal) プローブ、意味的 (thematic) プロンプト、および意味的 (thematic) プローブの4種になる。【翻訳書251頁】

第14章では、続いて、これらの具体例が挙げられている。

- ・形態的プロンプト：台詞をはっきり記憶していない俳優のために舞台裏からささやく。クイズの解答者に、音声的に似ているヒントを出す（「ワシントン」がクイズ正解となっている問題で、「washing」に関連したヒントを出す）
- ・意味的プロンプト：イントラバーバル (intraverbal) の利用。（「ワシントン」がクイズの正解となっている場合に「国家の父」というヒントを出す）
- ・形態的プローブ：鐘の音が何かを呼びかけているように聞こえる。それに基づいてある行動が起こる。
- ・意味的プローブ：自由連想実験

以上に挙げた「プロンプト」と「プローブ」のうち、「プロンプト」に関する手法はその後の応用行動分析学の発展のなかで広く活用されている*¹¹。そのいっぽう、「プロービング」のほうは、『言語行動』（Skinner, 1957）で詳細に論じられているものの*¹²、その後はスキナー自身の著作においても、その後の行動分析学の研究においてもあまり注目されていないように見受けられる。

4.2. 想起という行動

第16章では続いて「想起という行動」が論じられている。何かの名前がどうしても思い出せない時、人はしばしば、形態的もしくは意味的に関連した刺激を自ら発し、それをヒントにして正解となる反応を引き出そうとする。これはプロービングの一種であり、自身でプロービングを発する場合はセルフ・プローブ(self-probe)と分類される。具体例として、外国人の名前であれば、まずはどこの国の人かを手がかりにして思い出す。また、音声的特徴を形態的プローブとして発する場合などが挙げられている。

4.3. 問題解決

続いて取り上げられているのが「問題と解」である。上記の「名前を思い出す」も問題解決の一種であり、この場合、正しい名前を発するという反応が出現すれば問題は解決される。正解反応が出される過程で、補助的な刺激源を探索したり自ら発する行動が問題解決行動といえることができる。

「鍵が掛かった引き出しの鍵を見つける」、「ガス欠の自動車にガソリンを注入する」、「絡み合った知恵の輪を解きほぐす」、「ミステリー小説に出てくるすべての内容に適合する犯人の名前を見つけ出す」、「素数を常に発生させる数式を作り出す」なども同様であり、問題の解となる反応を生起させるような補助的な行動は問題解決行動と言うことができる。【翻訳書291～292頁】

但し、そのような補助的なプロセスの助けを借りなくとも、全く偶然に、正解となる行動が生起する場合もある。また、試行錯誤により結果として問題解決がなされる場合もある。スキナー自身は、こうした偶発的な解決は問題解決ではないと述べている。【翻訳書293頁】

問題解決(あるいは問題解決モドキ)のプロセスとしてスキナーは、形態的プロンプティング、三段論法、さらにはセルフプローブ(self-probe)の効用に言及している。

4.4. アイデアを思いつく

第16章では続いて「アイデアを思いつく"HAVING AN IDEA"」という節がある。「数学者が、

*11 『行動変容法入門』(ミルテンバーガー著、園山ほか(訳)、2006)では、「第10章 プロンプトと刺激性制御の転移」という章が設けられており、「反応プロンプト」として「言語プロンプト」のほか「身振りプロンプト」、「モデルプロンプト」、「身体プロンプト」の合計4タイプ、「刺激プロンプト」として「刺激内プロンプト」と「刺激外プロンプト」の2タイプにそれぞれ分類され、詳細に解説されている。ちなみにここでの「プロンプト」は「行動の遂行の直前や遂行中に提示される刺激であり、強化を受ける行動が起きやすいように手助けするものである(Cooperほか、1987)」という定義が引用されていた。

*12 「プロービング」については、1948年に行われた「VERBAL BEHAVIOR by B. F. Skinner William James Lectures」で論じられ、その後公刊された『言語行動』(Skinner, 1957)では259～268頁により詳細な記述がある。原書257頁以下では、まず、「formal probes」が「echoic probes」と「textual probes」、「other types of formal probes」に分類されている。また「thematic probes」についてはユングの連想実験などにも言及され267頁の「The Question of Awareness in Formal and Thematic Probes」で総括されている。268頁ではロールシャッハテストにも言及がある。

ある問題に取り組むのを断念したのち、とつぜん、その解が頭に浮かんでくる」、「アイデアが突然ひらめく」というような現象は、必ずしも「無意識的な思考」が働いたわけではない。ある新奇な反応(アイデア)が、ごくわずかな特性だけを共有する別の刺激によって引き起こされる場合がある。それらはメタファー(隠喩)の効果であるとされている。

4.5. アイデアの独創性

第16章の最後は「アイデアの独創性 ORIGINALITY IN IDEAS」で締めくくられている。ここではそもそも独創的とは何か?について疑問が投げかけられている。

国語辞典によれば「独創」とは

- ・【大辞泉】模倣によらないで、独自の発想でつくり出すこと。
- ・【新明解】他のまねでなく、独自の考えで物事を作り出すこと。

と定義されているが、「模倣によらず」とか「独自の発想で」ということは本当にできるのだろうか?

スキナーは1つ前の第15章「セルフコントロール」の章で、「セルフ」というのは究極的には外部環境変数によってコントロールされるものであると論じており、同じことは、アイデアについても言えると指摘している。

We saw that self-control rests ultimately with the environmental variables which generate controlling behavior and, therefore, originates outside the organism. There is a parallel issue in the field of ideas. 【原書, 254頁】

われわれは、セルフコントロールは究極的にコントロールする行動を生じさせる環境変数次第であること、つまり生活体の外側に生じる環境変数次第であることを述べてきた。アイディアの領域にも、同じような問題が存在している。【翻訳書, 301頁】

「独創」の内容を明確にするために、第16章ではまず、何が独創にあたらないのかが挙げられている。

- ・明らかな模倣 (*obviously imitative*)
- ・音声や文字による指示に従う反応 (*controlled by explicit verbal stimuli, as in following spoken or written instructions*)
- ・所定の数学的演算 (*routine mathematical operations*)
- ・公式の演繹的適用 (*the use of syllogistic formulae*)

そのいっぽう、ある一連の操作が、かつて一度も適用されたことのないケースに施された場合はその結果は斬新であると言われる。そのような意味で「独創的」と評価することはできるが、本質的には、類似の事態からの刺激誘導 (*supplied by stimulus induction from similar*

situations)、もしくは、他者と異なる生育歴を反映した結果であって、「模倣によらないで、独自の発想でつくりだす」という国語辞書の基準を満たすものとは言いがたい。

第16章(原書255頁)ではさらに、さまざまな強化随伴性が発達し、先祖の時代よりもうまくコントロールされるようになった現代(といっても、この著書が刊行された当時ではあるが)のほうが、より多様な独創性が生み出されるようになったと指摘している。科学技術はもとより、美術や作曲といった芸術の領域においても、創造的な発見や作品というのは、世間から隔絶された孤高の環境で生み出されるものではない。もちろん、他者との交流を遮断し静かに瞑想にふけるといった時間はあったかもしれないが、アイデアの根源となる素材や独創の手助けとなる補助的類似刺激は、高度に発達した情報社会によってもたらされるものである。じっさい、先祖の時代に比べて、スキナーがこの本を刊行した1950年代、さらに2000年代、... となるにつれて、新たな発見や創造は加速度的に増加していると言えよう。

第16章の最後のところで(原書256頁)スキナーは、もし独創性が、【過去の反応とは独立して独自に】自発されるようなもので【既存の情報や類似刺激に全く頼らず】何の法的なプロセスにも依拠しない【純粋なヒラメキのような】ものであるとしたら、人を独創的にするような教育、あるいは独創的発見をしやすくするような方法の開発は不可能であると論じている。そのいっぽう、スキナーの論じた考えが正しかったら、つまり、独創性なるものの本質が蓄積された情報及び、発見や創作につながるような補助的類似刺激の活用によってもたらされるものであるとするなら、より有効な教育方法を開発する可能性を否定する理由はどこにもなく、また個人はもとより組織、あるいは機械の利用を含めて、より創造的な思考方法を開発する可能性を否定する理由もどこにもないと結んでいる。

5. 「第17章 自然科学における私的な出来事」と自己関連概念

5.1. 徹底的行動主義を特徴づける「私的な出来事」

私的な出来事をどう扱うかということは、スキナーが創設した行動分析学(=徹底的行動主義)と、ワトソンらの方法論的行動主義の立場を区別する最も明確な基準の1つである。スキナーはPsychological Review誌の1945年特集号「SYMPOSIUM ON OPERATIONISM」の中で、この点を鮮明に論じている(Skinner, 1945)*¹³。

このうちの294頁の(3)という節では、

(3) The distinction between public and private is by no means the same as that between physical and mental. That is, why methodological behaviorism (which adopts the first) is very different from radical behaviorism (which lops off the latter term in the second). ...【後略】

として、方法論的行動主義と徹底的行動主義の違いを鮮明にしている。

また、続く(4)では、

(4) *The public-private distinction apparently leads to a logical, as distinct from a psychological, analysis of the verbal behavior of the scientist, although I see no reason why it should. Perhaps it is because the subjectivist is still not interested in terms but in what the terms used to stand for. The only problem which a science of behavior must solve in connection with subjectivism is in the verbal field. How can we account for the behavior of talking about mental events? The solution must be psychological, rather than logical, and I have tried to suggest one approach in my present paper. . . .* 【後略】

というように、私的出来事の行動分析には言語行動の分析が不可欠であることが1945年時点ですでに指摘されている。

こうした考えは、『科学と人間行動』（Skinner, 1953）や『言語行動』（Skinner, 1957）の中でさらに精緻化され発展していった。

さて、「私的出来事」については、

- ・ どのような出来事が「私的」にあたるのか
 - ・ どのようにしてそれを「知る」のか
 - ・ 個人は自分の私的な出来事を「正確」に把握できるものか（その場合の「正確」とは何を意味するのか？）、
 - ・ さらには、どうやって出来事の内容や程度を他者に伝えることができるのか
- という問題がある。

5.2. 私的出来事の種類

Skinner (1945, 1953) では、私的出来事の典型例としてまず歯痛が挙げられている。熱いストローブに触れた時の痛みは、触れた人たちに共通して経験される出来事であるのに対して、個人の特定の歯において生じる歯痛は、当人以外には誰も経験できないことであり、明らかに私的出来事と言える。但し、私的出来事であるからと言って、特別な構造や特性 (any special structure or nature) があるわけではない。あくまでその刺激を把握する方法が限られている (its limited accessibility) という点で区別される (原書, 257-258 頁)。

次に挙げられている私的出来事の例は色に関するものである。「赤い色が見えた」といった情

*13 巻頭言 (Introduction) によると、この特集号は、編集者がスキナーのほか、BridgmanやBoringなど当時の著名な研究者に対して操作主義に関する11項目の質問書簡を送り、それに応じた6名の回答を掲載。さらに集まった回答がゲラ刷りとなった段階で、すべての回答者に回され、簡単な反論・意見を述べてもらうという企画があり1名を除いてこれに応じた。この追加意見は「Rejoinders and Second Thoughts」としてまとめられている。通常、当該のスキナーの著作は、引用文献表では、

Skinner, B. F. (1945). The operational analysis of psychological terms. *Psychological Review*, 52, 270-277, 291-294.

と記されるが、このうち270～277頁が最初の回答文、291～294頁は「Rejoinders and Second Thoughts」の中のスキナーの追加意見表明部分にあたる。後者の部分は、

Boring, E. G., Bridgman, P. W., Feigl, H., Pratt, C. C., & Skinner, B. F. (1945). Rejoinders and second thoughts. *Psychological Review*, 52, 278-294.

というように回答者の共著論文として引用されることもある。

報が他者にうまく伝わるのは、共通する感覚器官を持ち、かつ、色彩のカテゴリーを共有している場合に限られる。色覚障がいを持っている人にはこの情報は正確には伝わらない。また、ヒンバ人^{*14}のように異なる色彩のカテゴリーを有するとされている人たちとのあいだで、どういう色が見えたのかを言語だけで伝えるのはなかなか難しい。

次に第17章の原書261頁以降では、内部感覚的な刺激 (interoceptive stimuli) と自己感覚的な刺激 (proprioceptive stimuli) を区別する習慣が取り上げられている。前者は主として内臓など体の内部を起源とする刺激、後者は、事物の表面がベタベタしているかツルツルしているかといった、外部との接触に伴って発生する刺激が含まれている。但し、重要な点は、刺激が作用する部位ではなく、反応がコミュニティに受け入れられている程度 (accessibility) である、と強調されている。

このうち、内部感覚的な刺激の発生を他者に伝えることはなかなか難しい。スキナーが例に挙げている歯痛のほか、頭痛や腹痛なども他者と共有することはできない。「頭を叩かれた時の痛みに似ている」とか、「打ち寄せる波のように間欠的に痛む」というように、別の事象との類似性をもって伝えるという手段が一般的であろう。とはいえ、仮病を見抜くのは容易ではない。

いっぽう、自己感覚的な刺激のほうは、同じモノに触れてみるとか、同じモノを味わうというように、共通体験をすることである程度、刺激を「共有」することはできる。

5.3. 私的出来事をどのようにして「知る」か

行動分析学では「知る」は特定の行動の分化強化として定義される^{*15}。これで十分かどうかという議論はさておき、とりあえずはこの定義に従って、私的出来事をどのようにして知なのか、検討を加えていくことにしたい。

前節で述べたように、からだの内部で起こっている出来事は内部感覚的な刺激、あるいは自己感覚的な刺激として受容され、対応する行動が生じる。基本的な生理現象、例えば飢餓、呼吸困難、疲労、怒り、性的興奮などは、ダイレクトに行動につながるかもしれない。しかし、より繊細に把握されるためには、その刺激が弁別され、言語的に記述されることが不可欠となる。この点に関しては、

ある個人の弁別的な行動を記述する言語的なレポーターは、刺激が提示されるとか受け取られるというよりも、むしろ弁別的な反応が起こっている外在的な証拠に基づいて習得される。... 【中略】.. コミュニティによって用いられる公的な出来事に併行した私的な出来事は、弁別的な行動の結果ではあり、単純な刺激の結果ではない。【翻訳書, 314頁】

*14 いくつかの研究によれば、ヒンバ人の色の呼称は、現代人一般の色彩カテゴリーとは異なっており、現代人が容易に区別できる青と緑の色が弁別困難であったり、逆に、現代人には殆ど同じように見える緑色系の2色に対して異なる呼称が対応している場合があるという (Reiger & Kay, 2009参照)

*15 “The behavior which we call knowing is due to a particular kind of differential reinforcement.” 【Skinner, 1953, 287頁】

として弁別的な行動の重要性が強調されている。

この弁別は、例えばボールを正確に投げるというように、言語共同体の助けを借りずに、自分自身の運動が生む刺激を弁別刺激として、投げた結果によって分化強化されていく場合もあるが(原書261頁)、多くの場合は、言語共同体が用意したカテゴリーを用いて弁別され、強化されるというプロセスをたどる。

自己観察も、弁別的な随伴性の産物である。弁別がコミュニティによって強められないならば、自己観察は決して生じないかもしれない。奇妙に思われるかもしれないが、人に“汝自身を知れ”と教えるのはコミュニティである。【翻訳書, 309頁】

5.4. 私的出来事をどのようにして伝えるか

この方法については、『言語行動』(Skinner, 1957)でより詳しく論じられている。その概要は、O'Donohue & Ferguson (2001)によって以下のようにまとめられている。【箇条書きは長谷川による改変。訳は、佐久間(監訳)(2005)による】。

・ *One is by way of a common accompaniment (e.g., upon seeing a sharp object pierce the flesh, individuals are taught to say "That hurts!" p.131);* 1つは、共通体験によってである。たとえば、ナイフが筋肉に突き刺さっているのを見て、「痛い」という表現を教える

・ *the second is to use some collateral response to private stimulation (e.g., upon seeing a person rubbing his or her head, the verbal community teaches him or her to tact "I have a headache" p.131);* 2つ目は、私的出来事の付帯的反応を通してである。たとえば、頭をさすっているのを見て、頭痛なのだとタクトすることを教える

・ *a third way is when a speaker's behavior recedes in magnitude to covert form (e.g., saying something to oneself that was once said aloud; p.133);* 3つ目は、話し手の言語行動を聞こえないレベルにまで小さくすることを教える。たとえば、ことばを覚え始めた頃には、言語行動をすべて声に出しても、「うるさい」と罰せられないが、やがて、「静かに!」と言われるようになる。読書の時にも黙読が強いられる。こうして必要な時にだけ、自分自身についてタクトするようになる^{*16}

・ *a fourth and fifth way one learns to tact private stimulation is via metaphorical and metonymical extension (p.133).* 4つ目と5つ目は、隠喩と換喩である。隠喩、換喩を通して私的出来事をタクトすることを学ぶ

【O'Donohue & Ferguson., 133頁】

上記の方法は、私的出来事の中身だけでなく、その程度(「○○と同じくらいに痛い」とか、比較や変化(「昨日より半分くらいの痛みになった」といった報告においても有効である。

5.6. まだ実行していない行動の記述

第17章(262頁)では、まだ実行していない行動についての記述、例えば「私は3時に帰宅

*16 この部分は、原文が補足された訳となっている。

しようとしている (実際はまだ帰宅していない)。「I was on the point of going home at three o'clock," though he did not go.」、さらには「私は30分以内に帰宅するでしょう (I shall go home in half an hour)」といった未来形が以下にして表明しうるか、といった問題が考察されている。

こうした予告的表明ができる理由として、まず過去において、帰宅する際には、何らかの特徴的な諸刺激がそれに先行することを繰り返し体験することが挙げられる。それら諸刺激には公的なものもあれば私的なものも含まれている。そして、そのうちの一部の刺激が起こった時に、「私は、私の帰宅に特徴的に先行し、あるいは特徴的に伴う出来事を、観察した」と同じ意味で、予告的な表明がなされるという可能性である。

もう1つは、まだ自発していない行動について述べる時、実際には変数の歴史について述べているという可能性である。過去に、「こういう条件が揃った時にこういう行動をする」ということが繰り返し体験されれば、同じ条件が揃った時には未来の行動を予測することができる。私的出来事ではあるが、条件が観察可能であれば、他者からも同じように予測できる。

例えば、「回転寿司を食べに行くか、ラーメン屋に行くか?」と尋ねられたときに「ラーメンを食べに行きたい」と答えるのは、まだ実行していない行動についての予告的な表明と言える。当人の好みは寿司よりもラーメンであったとすれば、当然そのことは過去の履歴に残るゆえ、第三者でもそれを予告することができる。また、ラーメンと回転寿司の好みが同程度であった場合は、前日に何を食べたか、サイフの中にお金がいくら残っているか (←回転寿司のほうがお金がかかるとして) といった条件を調べれば、ある程度の予測ができる。

けっきょくのところで、まだ実行していない行動といえども、当人が過去に受けた強化の歴史や、遮断化・飽和化といった確立操作に関わる情報を把握すれば、予告的な私的出来事はかなりの精度で予測できるであろう。

5.7. 私的出来事を他者に伝えることの有用性

私的出来事を他者に伝えることには、単に「○○を見ている」というような行動報告から、社会心理学などで研究されている自己開示のような行動までさまざまな内容があるが、どのような内容や程度であれ、行動分析学の強化の原理を前提とする限りにおいては、話し手と聞き手の双方にとって何らかのメリットが無ければそのような伝達は起こりえない。

取り調べを受けている容疑者は通常、自分が不利になるような私的出来事は語らない。しかし、状況証拠が明白であり、自白したほうが罪が軽くなると想定される場合は、容疑者は包み隠さずに犯行内容を語る場合がありうる。

集団行動においては、構成員が私的出来事を語ることは有用な情報となる。誰かが「私はくたびれている」と言った時、無理に作業を続けると、けっきょくはチームワークに悪影響が出てくる。この場合、集団全体、あるいはその発言者のみに休憩をとらせるというように対処するだろう。

「○○が出現した」というような「客観」表現としてのタクトと、「私は○○を見ている」という

私的出来事の表明は明らかに異なっている。単に外界の情報を得るだけであるなら「○○が出現した」で十分のはずである。にもかかわらず「私は○○を見ている」という表明が他者にとってより有用になるのはなぜだろうか。このことに関しては以下のような指摘がある。

「空に虹がかかっている」とか「時計が12時の時報を打っている」と言う場合、コミュニティが言語的な反応を作り上げてきた刺激事態と一定の条件づけの手續きとによって、その行動に合理的な解釈を与えることができる。しかし、彼が「私は空に虹を見る」とか「私は時計が12時の時報を打つのを聞く」と言うならば、付加的なその用語について説明が加えられなければならない。その重要性について簡単に例示しよう。ある個人が、彼だけに関している出来事に言語的に反応する場合、集団は利益を得るのが普通である。彼が言語的に反応するとき、彼の話聞いてくれる環境を広げている。しかし、彼が反応しているときの条件を彼が報告することもまた重要である。報告の場合、話すことで彼は“情報源”を明らかにしている。【翻訳書、314頁】

情報源を明確にすることは、現象が発生する条件や文脈を伝えるばかりでなく、しばしば情報の信頼性の手がかりにもなる。「私はオオカミを見た」という表明は、視力のすぐれた狩人が発した場合と、イソップの寓話に出てくる羊飼いの少年が発した場合では信頼性が異なる。

5.8. 「見る」という行動

第17章では、「見る」という行動についてのかかなり詳しい記述がある。「第8章 環境コントロール」の最後のところで、単なる刺激の受容と、見るという能動的な行動との違いを指摘した上で、17章では原書266頁から275頁の9頁にわたって、「見る」ということについての詳細な記述がある。次の「第18章 自己」の章が全体でも12頁であることを考えると、スキナーが「見る」という行動にいかに関心していたのかということが示唆される。

このうち「conditioned seeing」というのは、レスポナント行動としての「見る」である。事例として、食事の合図であるベルの音が聞こえた時、唾液分泌のほか、実際に見えていないはずの食べ物が見えている可能性があるというような論考であった。

この場合、刺激 x が提示される時だけでなく、刺激 X に頻繁に付随してきた刺激が提示される時にも、刺激 X を見るかもしれない。例えば、食事の合図であるベルの音は唾液分泌を生じさせるだけでなく、われわれに食べ物を見させるのである。【翻訳書315頁】

もっとも、もし日常生活でそのような条件反応が頻繁に出現したとしたら、風景は一変してしまう。最近めざましい発展をとげている“超”仮想現実映像が、何の装置も使わずに、レスポナント条件づけだけで勝手に見えてしまうことになるが、これでは環境にうまく適応することはできない。道路と妖怪を繰り返し対提示するだけで道の向こうから妖怪がやってくるように見えたり、レストランの前を通るだけで食べ物がぶら下がっているように見えたりしたら、安心して道を歩くことさえできない。

ということもあり、我々の目に入ってくるのは、「いま、ここ」にある世界のみである。条件反応としての「seeing」は、通常は「思い浮かべる」という形をとり、現実世界とは容易に区別で

きる。

とはいえ、我々の目に入ってくる世界といっても、実際に見えていると思っているのは、ある程度、加工され、翻訳された世界である。原書267～268頁には、知覚の恒常性やゲシュタルト知覚の例として、トランプのスーツの色と形(ちらっとみたマークの色が赤色であれば、スペードやクラブではなくハートやダイヤの形に見える)、欠けたリングが欠けていないように見える現象などが挙げられている。じっさい、多義図形では、見慣れた図形に見えやすくなること、つまり過去に繰り返しレスポナント条件づけされていると、その形に見えやすくなってしまふことが知られている。

このほか、原書268頁では共感覚 (synesthesias) にも言及されている。ある種の共感覚は、幼少時のレスポナント条件づけに起因している可能性がある*¹⁷。

レスポナント行動としての「見る」に続いて、オペラント行動としての「見る (operant seeing)」についても詳しい記述がある。ここでの「見る」は「seeing」ばかりでなく「Xを注視する (looking at X)」、ばかりでなく「Sを探す (looking for X)」という行動のしくみについても語られている。節の後半では、「頭の中で立方体の問題を解く、チェスの先の手を読む」といった行動についても考察されている。

5.9. 「イメージを描く」、「アイデアが浮かぶ」

「問題への伝統的な取り組み (traditional treatment of the problem) ではさらに、「イメージを描く」や「アイデアが浮かぶ」といった行動についても考察されているが、1950年代での考察は多分に推測的であり、行動分析学以外の立場からは批判されることもある。いずれにせよ、1950年代の段階では、この問題は宿題として残されている*¹⁸。

感覚やイメージ、それらの類は、“意識”という特殊な世界で生起する心的な、あるいは精神的な出来事として特徴的に見なされる。それらは空間的位置を占めていないにもかかわらず、度々見られる。今の時点では、このやっかいな問題である物理的な世界と非物理的な世界との区別がなぜ最初になされたのかという理由を、確信を持って言うことはできない。しかしそのような区別は、再検討する価値のある問題を解決する一つの試みであったであろう。【翻訳書328頁】

*17 例えば、ピアノの練習時、ドレミに赤、黄、緑といった色を対応づけた経験を繰り返しているうちに、音を聞いただけで色が見えてくることがあり、一部の人は成人になっても残るなどと言われている。また、文字に色がついて見えるという人も、最初から色がついているわけではない。共感覚者の外国語が漢字を覚えた場合、ある程度習熟してからでないと色がつくことはないと言われている。

*18 ちなみに、この節では、オッカムの剃刀についてのスキナーの考えが述べられておりまことに興味深い。スキナーは、何でもかんでもそぎ落とすという立場はとっていないことに留意する必要がある。

Science does not always follow the principle of Occam's razor, because the simplest explanation is in the long run not always the most expedient. 【原書280頁】

科学は、オッカムのかみそり (Occam's razor) の原理に常に従うとは限らない。というのは、最も単純な説明が、長期的に見て最も得策とは限らないからである。【翻訳書332頁】

5.10. その他の留意点

第17章の終わりの部分には、行動分析学の原則に関わるいくつかの論考がある。以下4つの節について、重要と思われる論点を挙げておく。

まずは、自分自身の私的出来事を分析することについて（「Studying one's own private world」）。

It is true that psychologists sometimes use themselves as subjects successfully, but only when they manipulate external variables precisely as they would in studying the behavior of someone else. The scientist's "observation" of a private event is a response to that event, or perhaps even a response to a response to it. In order to carry out the program of a functional analysis, he must have independent information about the event. 【原書280頁】

心理学者が自分自身を被験者として研究し成果をあげることもある。但しそれは、他者の行動を研究する時と同じく、外部変数を正確に操作できる場合に限られている。ある私的出来事について科学者が観察するのは、その出来事に対する反応、というか、おそらくその反応に対してさらに行う反応である。機能分析のプログラムを実行していくためには、研究者は、その出来事について独立した情報を把握することが不可欠である。【長谷川訳】

この原則は、他者の私的出来事を把握する場合にも適用される。

For a similar reason he cannot solve the problem of private events in the behavior of others by asking them to describe such events. It has often been proposed that an objective psychology may substitute the verbal report of a private event for the event itself. But a verbal report is a response of the organism; it is part of the behavior which a science must analyze. The analysis must include an independent treatment of the events of which the report is a function. The report itself is only half the story. 【原書280頁】

同様の理由により、他者に対して、当人の行動における私的出来事の言語報告を求めるというやり方では、問題を解明することはできない。客観心理学ではしばしば、私的出来事についての言語報告をその出来事自体に置き換えることが提案されている。しかし、言語報告というのは、生活体の反応の1つなのである。（報告された内容は）出来事そのものではなく、行動の一部なのであって、科学はそれ自体を分析対象としなければならぬ。言語報告というのは、半ば物語に過ぎないのである。【長谷川訳】

続く「The physiology of sensation (感覚の生理学)」という節では、1950年当時に提唱されていた2つのアプローチについての批判的な論考がある。モノを見る生理学的な仕組みがより詳細に解明されたとしても、見るという行動をコントロールする変数の機能分析にはつながらない。また、「虹を見る」を例にとれば、機能分析上は、虹は「見られている対象」ではない。あくまで、「虹を見る」という行動をコントロールしている変数の一部であると捉えるべきであると論じられている。

次の「Operational definitions of sensation and image (感覚とイメージの操作的定義)」という節は、方法論的行動主義に対する批判となっている。

最後の「The private made public (私的な出来事が公的な出来事を作る)」という節は、見出しだけからは社会構成主義的な論調のように推測してしまうが、ここでは、私的な出来事と公

的な出来事との明確な境界は存在せず、センサーの開発といった科学技術の進歩によって、その境界は常に移動し、それまで私的出来事としてしか捉えられなかったことが公的出来事化する可能性があるというような内容にとどまっていた。これについては7.3.で再び言及する。

6. 「第18章 自己」

第18章では、「自己」に関して以下の問題が重点的に扱われている。

- (1) 「行動の始発因としての自己」の否定
- (2) 単に「機能的に統一された反応システム」としての自己
- (3) 自己知識の欠如
- (4) シンボル(←フロイト)

6.1. 行動の始発因としての「自己」の否定と、統一された反応システムとしての「自己」

「自己」はしばしば、行為の仮説的原因として用いられてきた。この点については以下のような記述がある。

自己はごく一般的に、行為 (action) の仮説的原因として用いられる。外在している変数が気づかれずに進行したり、あるいは無視されたりする限り、自己の機能は、生活体内にある行為の始発者 (originating agent) に帰される。行動の原因を示せないならば、われわれはその人自身がその原因であると言っている。物理学の先駆者たちも、かつてそれと同じ思考上の習慣 (practice) に従った。しかし、風の神アエオロスが風をおこすのでもないし、雨の神ジュピター、プルビウスが雨を降らせるのでもない。このような思考上の習慣がなくならないのは、擬人化 (personification) の考えが、同様の行動の説明を要する人の概念に大変近いためであろう。この習慣は、説明できない現象に対して持つわれわれの不安を解消させるし、その不安が解消するために、思考上の過ちを犯させる。【翻訳書337頁】

ということで、まずは行動の始発因としての自己が否定される。代わりに採用されるのが、(2)で論じられている以下のような定義である。

...a self is simply a device for representing a functionally unified system of responses.【原書285頁】

...自己は単純に、機能的に統一された反応システムを意味する装置である。【翻訳書339頁】

この結論を正当化するためには、実際にはどのようにして「機能的な統一」がはかれるのか、あるいは統一されず、対立したり、優先順位が入れ替わっていくような複数のシステムがあるのか、を明らかにしなければならない。この点について第18章では、パーソナリティやフロイトの3つの自己などに言及しつつ、統一体の過大評価については警鐘を鳴らしている。状況や文脈が異なれば、異なった行動傾向が生じるのは当然であろう。ちなみに、『科学と人間行動』においては、「アイデンティティ identity」という言葉は一度も出てこない^{*19}。ある人が長年にわたり一貫性のある特徴的な行動傾向を示したとしても、それは、その人の行動をコントロー

*19 原書のPDFファイルで「Identity」、「identity」の検索語がヒットしないことにより確認した。

ルしている環境変数が長年にわたり安定かつ不変であったためかもしれない点に留意する必要がある。

6.2. 自己知識の欠如 (THE ABSENCE OF SELF-KNOWLEDGE)

第18章では原書288頁から292頁まで5頁にわたってこの問題が論じられている。

5.3. で引用したように、ここでは「知る (knowing)」とは、

The behavior which we call knowing is due to a particular kind of differential reinforcement. 【原書288頁】
われわれが知る (knowing) と呼んでいる行動は、特定の種類の分化強化なのである。【翻訳書342頁】

というように定義されている。この定義に基づけば、どういうことが分化強化されているか、あるいは分化強化されていないかを把握することにより、自己知識の中身、あるいは自己知識が無かった場合の状況を克明に知ることができるであろう。

この節では、自分の過去の行為を思い出せない現象、自分が何をしているかに気づかない現象、これから先に何をするつもりであるかを知らない現象、さらには、自分の行動をコントロールしている環境変数が分からない現象というように、過去・現在・未来それぞれにおける自己知識の欠如について、論じられていた。スキナーは、これらのことがうまく言語報告できないのは、それが観察できないかどうかではなく、それを弁別し言語化することが適切に強化されなかったためであると指摘している。

... この種の弁別的な行動が、適切な強化によって生み出されない限り、そのような行動の生起を期待することはできない。したがって、自己知識は特殊なレパトリーである。報告できなかった行動が、実際に彼によって観察可能か否かではなく、彼がそれを観察する理由をこれまでに与えられてきたかが、決定的に重要である。【翻訳書345頁】

これ以外の場合として、観察に必要な自己刺激があまりにも弱すぎて弁別困難であった場合、より優位な反応が弁別的な反応を起しにくくしている場合 (戦闘場面など)、睡眠や薬物の影響下なども自己知識の欠如をもたらすと指摘されている。

もう1つ、戦闘場面との対比で、自己記述 (self-discription) というレパトリーが作り上げられないうちの出来事は思い出せない場合として、幼児期の出来事は思い出せないという事例が挙げられていた【翻訳書346頁】。戦闘場面のほうは優勢の原理 (the principle of prepotency) によって説明される。つまり、戦闘という強烈な反応が弁別的な反応より優越するため、自分の行動を観察することが困難となる。それに対して幼児期の出来事が思い出せないのは、幼児期には未だ、自己記述のレパトリーが確立できていないためであると推測されている。

第18章の終わりのところでは、抑圧 (Repression) やシンボル (Symbol) についての論考がある。これらはフロイトの考え方に対するスキナーの立場表明という側面もある。20世紀初頭か

ら半ばにかけては、フロイトの精神分析は、心理学、精神医学はもとより、人文・社会諸科学や文化・芸術に多大な影響を及ぼしていたと言われる。1953年に刊行された『科学と人間行動』においてもスキナーは当然、このフロイトの精神分析の影響力を念頭において、執筆内容を吟味していったものと思われる*²⁰。

7. その後の進展

冒頭に述べたように、本稿は「連載その(1)」として、スキナーの初期の著作『科学と人間行動』(Skinner, 1953)を中心として、1940年代の論文や、1950年代に刊行された『言語行動』(Skinner, 1957)の一部の章に言及しつつ、スキナーの初期の考えに焦点を当てた。よってここでは、あくまで暫定的に、続編へのつなぎという範囲で、その後の進展について述べることにする。

7.1. 「第15章 "セルフコントロール"」

セルフコントロールについてはその後、選択行動の諸研究を含めて、大きく発展した。その1つの流れは、Rachlin (2000)の著書において体系化されている。また別の流れとして、ルール支配行動の理論(長谷川, 2015参照)に依拠したセルフ・マネジメント(Self-management)の諸研究がある。

7.2. 「第16章 思考」

思考に関しては、まず、その後にスキナー自身によって提唱された「ルール支配行動」を挙げることができる。長谷川(2015)が言及しているように、スキナーの「問題解決」に関する論考は1960年代以降、「ルール支配行動」と関連づけられるようになっている(Skinner, 1966; 1969)。

もう1つ1953年当時は推測的に論じられていた「暗示」「プロービング」「メタファー」は、近年登場した関係フレーム理論の中で発展し、アナロジーやメタファーのしくみがしっかりと定式化されるようになった点が注目される*²¹。同じく、個人がいかにして三段論法的思考やセルフプローブを身につけられるのかについては、少なくともSkinner (1953)の段階では特段の言及はなかったが、その後、関係フレーム理論の中で複合的(相互的)内包として新たな進展があった(Törneke, 2010, 63頁、翻訳書88～89頁参照)。

7.3. 第17章 自然科学における私的な出来事

5.2. で言及した「自己感覚的な刺激(proprioceptive stimuli)」の共通体験の考えは、これを拡張していくと、

*²⁰ 『科学と人間行動』は本文447頁から構成されているが、本文中には「Freud」あるいは「Freudian」は合計40回、つまり11頁に約1回の割合で出現しており、当時の精神分析の影響力と、それに対するスキナーの配慮の大きさを窺い知ることができる。

*²¹ 例えば、Törneke(2010)の第5章「Analogies, Metaphors, and Our Experience of Self」。

「共通体験が可能な私的出来事の最大公約数」とその共通性を確認する言語行動から公的出来事が作られる。

という意味で、「The private made public. (私的な出来事が公的な出来事を作る)」という考えに達する。但し、第17章の原書282頁では、「自然科学における私的な出来事」というタイトル通り【下線は長谷川による】、自然科学的方法の発展により私的出来事の「公的出来事化」が可能となるという考え方に立っている*22。

5.3. の「私的出来事を知る」については、次の第18章において「自己知識」として取り上げられているが、関係フレーム理論の「3つの自己」のうちの1つにも

・ THE KNOWING SFLF (Self-as-process.) : 「プロセスとしての自己」*23

というのがある。じっさい、この側面は「私的出来事」と密接につながっている。Törneke (2013, 107頁、翻訳書150頁)はこの点について、

Self-as-process is similar to Skinner's concept of private events, which we can learn to tact. It is the ongoing, observable process of ourselves: behavior that is occurring in the moment and that makes up part of what each of us calls myself—feelings, memories, bodily sensations, and thoughts. It always exists here and now.

「プロセスとしての自己」は、Skinnerの私的出来事概念と似ていて、私たちはそれをタクトすることを学習できる。それは現在進行形の、観察可能な、自分自身についてのプロセスである。それは、その瞬間に起きている行動で、私たちがそれぞれに自分自身と呼ぶものを作り上げているものの部分—気分・記憶・身体感覚、そして思考—である。それは、常に「ここに」存在する。

と述べており、「プロセスとしての自己」のルーツがスキナーの概念にあることが分かる。このことに関しては、本稿の続編以降で改めて論じる予定である。

5.4. に述べた方法をうまく使えば、私的出来事の中身だけでなく、その程度、比較、変化なども伝えることができると述べた。とはいえ、複数の出来事の強さ自体を比較したり、さらに量的差違を比較したりするには、やはり、関係反応*24を身につけるプロセスが必要であろう。当然のことながら、1950年代にはまだこのような発想は議論されていない。

5.6. の「まだ実行していない行動の記述」に関しては、単に予兆的な周辺刺激を手がかりにして予告するというばかりでなく、ルール支配行動的な予告が可能であろう。例えば「私は3

*22 長谷川 (2015) で言及したように、スキナーの徹底的行動主義、特に初期の著作には機械主義と文脈主義が混在していると指摘されている。武藤(2001)、Hayes & Hayes (1992)を併せて参照。

*23 関係フレーム理論に関する一部の書籍では「プロセスとしての自己」を「THE KNOWING SELF」と呼んでいる。例えば、Hayes, Barnes-Holmes, & Roche. (Eds.). (2001), 127頁、Stewart, Villatte, and McHugh (2012), 29頁

*24 長谷川 (2015) では、関係反応を「単一の刺激の絶対的な特性に対応した反応ではなく、複数の刺激間の相対的な特徴に対応して生じる反応」と暫定的に定義し、また、ヘイズ・ビストレッロ(2009)の「関係づけるとは、ある事象に対して、他の事象の観点から反応するということである。」という定義に言及している。詳細な議論は長谷川(2015)の2.1.8を参照されたい。

時に帰宅しようとしている」というのは将来の一連の予定を記述したルールの一部であり、その内容を表明していると考えられることができるだろう。もっとも、1950年代のスキナーの論考では、まだ「ルール支配行動」というアイデアが取り入れられていなかった。長谷川(2015)の中で言及しているように、スキナーの著作の中でルール支配行動 (rule-governed behavior) という言葉が初めて使われるようになったのは1966年 (Skinner, 1966)、その後、1969年に刊行された、『Contingencies of Reinforcement: A Theoretical Analysis』 (Skinner, 1969)では、第5章でいったん言及されたあと、第6章で詳述されている。現在では、より長期的なスパンで、かつ計画性のある私的出来事の表明は、大部分、自己ルールの表明という形で説明できるようになったと考えてよさそうだ。

7.4. 「第18章 自己」

6.で取り上げた「機能的に統一された反応システム」としての自己概念は、自己に関連する多くの現象を説明し、また不要な概念をバツサリ削ぎ落とすという点で有効であるが、自己と他者に関する視点取得や人称表現の言語的記述の習得のプロセスまでは説明できていない。幼児期の出来事をうまく思い出せないというのも、おそらく、視点取得が関係していると思われるが、これらの点については本稿の続編以降で詳しく論じる予定である。

引用文献

- 藤永保(監), 内田伸子・繁樹算男・杉山憲司(編). (2013). *最新心理学事典*. 平凡社.
- 長谷川芳典 (2011). 徹底的行動主義の再構成—行動随伴性概念の拡張とその限界を探る—. *岡山大学文学部紀要*, 55, 1-15.
- 長谷川芳典 (2015). スキナー以後の心理学 (23) 言語行動、ルール支配行動、関係フレーム理論. *岡山大学文学部紀要*, 64, 1-30.
- Hayes, S. C. (1995). Knowing selves. *The Behavior Therapist*, 18, 94-96.
- Hayes, S. C., Barnes-Holmes, D., & Roche, B. (Eds.). (2001). *Relational Frame Theory: A Post-Skinnerian account of human language and cognition*. New York: Plenum Press.
- Hayes, S. C. & Hayes, L. J. (1992). Some clinical implication of contextualistic behaviorism: The example of cognition. *Behavior Therapy*, 23, 225-249.
- Hayes, S. C., Strosahl, K. D., & Wilson, K.G. (2011). *Acceptance and Commitment Therapy 2nd ed.* Guilford Publications Inc. 【ヘイズ, S. C., ストローサル, K. D., & ウィルソン, K. G. (著) 武藤崇・三田村仰・大月友 (監訳). (2014). *アクセプタンス&コミットメント・セラピー (ACT) 第2版 -マインドフルネスな変化のためのプロセスと実践 -* 星和書店.】
- ヘイズ, S.C., ビストレッロ, J. (著) 木下奈緒子 (訳) (2009). ACTとRFTにおけるカッティング・エッジ(最先端)の探究. *こころのりんしょう ã · la · carte*, 28(1), 77-86.
- 越川房子 (1999). 「自己」. 中島義明, 安藤清志, 子安増生, 坂野雄二, 繁樹算男, 立花政夫, 箱田裕司(編). (1999). *心理学辞典*. 有斐閣
- Lattal, K.A. (2012). Self in behavior analysis. In McHugh, L., & Stewart, I. (Eds.) *The self and perspective taking: Contributions and applications from modern behavioral science*. Oakland, CA: New Harbinger Publications, Inc. (pp.37-52.)
- ミルテンバーガー, R.G.(著), 園山繁樹・野呂文行・渡部匡隆・大石幸二(訳). (2006). *行動変容法入門*. 二瓶社.

- 武藤崇 (2001). 行動分析学と「質的分析」(現状の課題). *立命館人間科学研究*, 2, 33-42.
- 中島義明、安藤清志、子安増生、坂野雄二、繁榊算男、立花政夫、箱田裕司(編). (1999). *心理学辞典*. 有斐閣.
- O'Donohue, & Ferguson, K. E. (2001). *The psychology of B.F. Skinner*. Sage Publications.【佐久間(監訳). (2005). スキナーの心理学 応用行動分析(ABA)の誕生. 二瓶社】
- Rachlin, H., (2000). *The science of self-control*. Cambridge, Mass. : Harvard University Press.
- Reiger, T. & Kay, P. (2009). Language, thought, and color: Whorf was half right. *Trends in Cognitive Sciences*, 13, 439-446.
- Skinner, B. F. (1945). The operational analysis of psychological terms. *Psychological Review*, 52, 270-277, 291-294.【291～294頁は「Rejoinders and Second Thoughts」という追加意見表明部分】
- Skinner, B. F. (1953). *Science and human behavior*. New York: Macmillan.【スキナー(著)、河合伊六・長谷川芳典・高山巖・藤田継道・園田順一・平川忠敏・杉若弘子・藤本光孝・望月昭・大河内浩人・関口由香(訳) (2003). *科学と人間行動*. 二瓶社.】
- Skinner, B. F. (1966). An operant analysis of problem solving. In B. Kleinmuntz (Ed.) *Problem solving: Research, method, and theory* (pp.133-171). New York: John Wiley & Sons.【Catania, A.C. & Harnad, S. (eds.) *The selection of behavior The operant behaviorism of B. F. Skinner: Comments and consequences*. Cambridge: Cambridge Universities Press.にコメントつきで再掲】
- Skinner, B. F. (1969). *Contingencies of reinforcement: A theoretical analysis*. New York: Appleton-Century-Crofts.
- Skinner, B. F., & Vaughan, M. E. (1983). *Enjoy old age: A program of self-management*. New York: Norton.【本明寛(訳). (1984). *楽しく見事に年齢をとる法 いまから準備する自己充実プログラム*. ダイヤモンド社/大江聡子(訳). (2012) *初めて老人になるあなたへ ハーバード流知的な老い方入門*. 成甲書房.】
- Stewart, I., Villatte, J., & McHugh, L. (2012). Approaches to the Self. In L. McHugh, I. Stewart, & M. Williams (Eds.), *The Self and Perspective Taking: Contributions and Applications from Modern Behavioral Science*. New Harbinger Publications. (pp.3-35)
- Törneke, N. (2010). *Learning RFT: An Introduction to relational frame theory and its clinical applications*. New Harbinger Publications.【トールネケ, N.(著)武藤崇・熊野宏昭(監訳). (2013). *関係フレーム理論(RFT)をまなぶ: 言語行動理論・ACT入門*. 星和書店.】

補遺: 「self」を含む心理学用語

(1) 『心理学辞典』(中島・安藤・子安・坂野・繁榊・立花・箱田(編). 有斐閣、1999年)

(2) 『最新心理学事典』(藤永保(監)、平凡社、2013年)において英語表記とセットで収録されている用語から抽出した。◎印は両辞典に収録され、同一の訳語がつけられていた場合。◇印は(1)のみ、○印は(2)のみに収録または独自の訳語がつけられていた場合を示す。本文中で英語と対応されていない語は含めていない。

--「self-」で始まる例(79例)--

self-acceptance ◇自己受容

self-actualization◎自己実現

self-affirmation ◇自己肯定化

self-aggrandizement ◇自己拡大

self-analysis ◎自己分析

self-as-target ◇自己標的意識

self-assertion ○自己主張

self-attitude ○自己態度

self-attention theory ◇自己注意理論

self-attribution ◇自己帰属

self-awareness ○自己覚知/○自己意識/◇自覚状態

self-categorization ◎自己カテゴリー化

self-cognition ○自己認知

self-complexity ○自己複雑性

self-concep ◎自己概念/○自己観

self-confidence ◇自信

self contact ◇自己契約

self-control ◎セルフコントロール/○自己制御/○自制

self-conscious emotion ○自己意識感情

self-conscious evaluative emotion ○自己意識的評価感情

self-criticism ○自己批判

self-deception ◇自己欺瞞

self-defeating behavior ◇自滅的行動

self-destructive behavior ◇自傷行為

self-determination○自己決定

- self-development ○自己開発
 self-discrepancy ◎セルフ・ディスクレパンシー (理論)
 /○自己不一致
 self-disclosure ◇自己開示
 self-domestication ○自己家畜化
 self-efficacy ◎自己効力 (感)
 self-enhancement ◎自己高揚
 self-esteem ◎自尊感情 / 自尊心
 self-evaluation ◎自己評価
 self-expansion theory ○自己拡張理論
 self-exposure ◇セルフ・エクスポージャー
 self-feeling ○自己勘定
 self-focused ○自分中心
 self-fulfilling prophecy ◇自己充足予言
 self-handicapping ◎セルフ・ハンディキャッピング
 self-help group ◇セルフヘルプ・グループ
 self-hypnosis ◎自己催眠
 self-identification ◇自己同一視
 self-identity ○自己アイデンティティ
 self-image bias ◇自己イメージ・バイアス
 self-injured behavior ◇自傷行為
 self-instruction ◇自己教示
 self-knowledge ○自分についての知識 ◇自己知識
 self-love ○自己愛 (narcissism)
 self-management ○自己管理 / ◇セルフ・マネージメント
 self-monitoring ○セルフ・モニタリング ◇自己モニタリング
 self-narrative ○自己物語
 self-occlusion ◇自己隠蔽
 self-perception theory ○自己知覚理論
 self-persuasion ◇自己説得
 self-presentation ◎自己呈示
 self-preservation ◇自己保護
 self-psychology ○自己心理学
 self-rating ◇自己評定
 self-realization ◇自己実現
 self-recording ◇自己記録
 self-reference effect ◇自己言及効果
 self-reflection ◇自己内省
 self-reflective emotion ○自己反省の感情
 self-regulation ◎自己制御 (性) / ○自己調整
 self-regulated learning ○自己調整学習
 self-regulatory focus theory ○自己制御焦点理論
 self-reinforcement ◇自己強化
 self-relevant emotions ○自己関連感情
 self-reliance ○自己信頼
- self-report ○自己報告
 self-report inventories ○自己報告目録
 self-representation ○自己表象
 self-reproach ◇自責
 self-serving attribution ◇利己的帰属
 self-schema ◎セルフ・スキーマ
 self-statement ◇自己陳述
 self-stimulation ◇自己刺激
 self-sufficient ○自己充足的
 self-talk ◇セルフ・トーク
 self-terminating search ◇自動打ち切り走査
 self-verification ○自己確証 (理論) ◇自己確認 (理論)
- 「self」を含む熟語 (31 例)---
- a basic sense of self ○自己の基礎的感覚
 conceptual self ○概念的自己
 contingent self-esteem ○随伴性自尊感情
 cultural self-construal ○文化的自己観
 ecological self ○生態的自己
 explicit self-esteem ○顕在的自尊感情
 extended self ○拡張的自己
 faculty of self-education ◇自己教育力
 ideal self ◎理想自己 (ideal ego)
 implicit self-esteem ○潜在的自尊感情
 inclusion of other in the self (IOS) ○自己と他者の内包関係
 independent self and interdependent self ○独立的自己と相互依存的自己
 induced movement of self ◇自己誘導運動
 interpersonal self ○対人的自己
 intracranial self-stimulation method ◎脳内自己刺激法
 intravenous self-administration method ○静脈内自己投与方法
 looking-glass self ◎鏡映自己
 material self ○物質的自己
 other self ◇他我 (alter ego)
 ought self ○当為自己 / ○義務自己
 phenomenological self ○現象学的自己 (理論)
 possible self ◎可能自己
 private self ○私的自己
 recognition of mirror self-image ○鏡像自己認知
 remembered self ○想起的自己
 sexual self-determination ○性的自己決定
 social self ◎社会的自己
 spiritual self ○精神的自己
 spontaneous self-concept ◇自発的自己概念

symbolic self-completion ◇象徴的自己達成
verbal self-instruction strategy ◇言語的自己教示方
略
working self-concept ◇作動自己概念

---英語では「self」を含まないが日本語で「自
己」を含む例(6例)---

egocentric coordinate ○自己中心的座標系
egocentric speech ◇自己中心語
egocentrism ◎自己中心性／◎脱中心化
narcissistic personality disorder ○自己愛性パーソナ
リティ障害
narcissism ◎自己愛／◎ナルシズム
threatened egotism model ○自己本位性脅威モデル